慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	左縦書きと日本語の表記
Sub Title	Towards a left-to-right vertical writing system in Japanese
Author	小屋, 逸樹(Koya, Itsuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2018
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.139 (2018. 2) ,p.171- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	朝吹亮二先生退職記念特集号 = Theses in honour of the retirement of professor Asabuki, Ryoji エッセイ
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000139-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセイ

左縦書きと日本語の表記

小　屋　逸　樹

1. 日本語の複雑な表記法

「1952 年パリ生まれの AB 型」――この単純な表現の中に，日本語が決して国際言語にはなれない要因が示されている。それは，短い表現の中でも 5 種類の異なる文字体系を混在して用いるという点だ。まず，中国大陸から輸入され，日本最初の文字として定着した漢字がある。漢字は真名と呼ばれ，正式な文字としての地位を保ってきた。次に，真名に対して考案されたのが「仮の文字」を意味する 2 種類の仮名であり，共に漢字を基に作り出されている。平仮名は万葉仮名の草体化を経て，また片仮名は万葉仮名の略体化（一部を省略）を経て生まれた。さらに，キリスト教の伝来に伴い，ローマン・アルファベット（ローマ字）が日本に上陸し，加えてインド起源のアラビア数字（算用数字）も蘭学を契機に普及し始めたようである。日本語は，現在これら 5 種類の文字を全て混ぜて使うという，“世界で最も複雑で習得困難な表記法”（Fischer, 2001）をもつ言語になったのである。この「漢字仮名ローマ字算用数字混じり文」は何も特殊な内容を表現する時にのみ用いられるわけではない。われわれがふだん目にする「日吉キャンパスの J435 番」や「レモンに含まれるビタミン C の 2 倍」などという日常的な表現にも頻繁に出てくるのである。したがって，日本語を学ぶ者は，初期段階から多種の文字体系の学習を強いられ，その結果，話したり聞いたりできれば読み書きは諦めるという人が多く出現する

に至ったのである。駅名が読めなくても電車やバスが利用できる Suica カードがいかに多くの訪問者を救っているか，日本人には容易に想像できない。

複雑な表記法は，さらに多大な文字数という一層の困難を伴っている。例えば，漢字だけとっても，諸橋轍次の『大漢和辞典』には 5 万余字が収録されている。これほどの数は，日本人でも到底覚えきれず，また日常的にも必要とされないが，2010 年に告示された改定常用漢字表では 2136 字が基本的な漢字としてあがっている。26 文字のローマ字を使う人達から見れば，この字数とて膨大な数に違いない（ちなみに，「26 文字のローマ字」と言う時，文字は 26 種類ということであって，形状的には「A」と「a」，「B」と「b」はそれぞれ異なっている。ただ，「C」と「c」，「O」と「o」等は大きさのみの違いで，異なる形状とまで言ってよいかどうか）。個別言語における文字数は，数が多いほど言語の機能がより高度に発達しているということではない。英語の視点から見ると，同じ事象を記述するのに 26 種類の文字とアラビア数字しか使わなくても事足りるわけで，この方がよほど経済的だとも言えるのである。

日本語に覚えるべき 2000 以上の文字があり，そこに表意文字と音節文字（表音文字の一種）が含まれることは，日本の子供達は文字の学習に多大の時間を費やしていることを意味する。そのために，日本語文法やエッセイ作成のための時間が削られていると言ってもいいだろう。漢字の練習帳には書き順が記されており，予め薄く印刷された形状になぞって書くことが求められる。漢字は，特に書道の時間にその形状的美しさを磨く練習をしているが，「心」や「友」が一文字として書道の対象になるのは，それが表意文字として意味と結びついているからである。「こ」や「ト」だけをいくら書いても，1 文字ではただの音節を示すに過ぎない。漢字 1 文字をタトゥーとして入れる世界の若者が増えてきたが，仮名 1 文字を入れている人間に筆者はまだ出会ったことがない。仮名は単語レベルまで書いて初めて意味が明らかになる。1 音節の単語もないわけではないが，「い」が「胃」なのか「意」なのかは，漢字で書かなければそれこそ意が伝わらないのである。

漢字をどう発音するかは，日本語学習者にさらなる苦役を強いる課題である。「日曜日」と書いても，最初の「日」は音読みで「ニチ」，最後の「日」は

訓読みで「び」と発音する。「平日」の「日」は音読みで「ジツ」で，「三日」の「日」は訓読みで「か」である。これだけでも実に 4 種類の音があるが，「昨日」「今日」「明日」はそれぞれ「きのう」「きょう」「あす／あした」とも発音でき（いわゆる熟字訓），「日」の 1 字を含む表現だけでも数多の読み方が存在する。ところが，これを「サクジツ」「コンニチ」「ミョウニチ」と音読みすると，「コンニチ」だけが《本日》と《現在》との意味で曖昧になるという特殊性が認められる。基本的な単語で奇妙な現象と言えば，「日本」という国名の発音が「ニホン」とも「ニッポン」とも正式には決まっていないということであろう。オリンピック出場選手のユニフォームには「Nippon」という表記が目立つが，仮に「日本」を「ニッポン」と発音を固定化すると「日本酒」は「ニッポンシュ」と読まざるを得ず，東京の「日本橋」は大阪の「日本橋」と同じく「ニッポンばし」になってしまう。さらに日本語学習者泣かせの例をあげると，物の数え方には「～本」や「～枚」など多様な助数詞があって，対象によって数え方を変えなければならない。しかし，苦労して覚えた「本」が，「1 本（ぽん）」「2 本（ほん）」「3 本（ぼん）」と，数字によって「本」の発音が全て異なる。それでは「枚」もと思いきや，こちらは「1 枚（まい）」「2 枚（まい）」「3 枚（まい）」と読み方が変わらない。天を見上げたくなる心境になるだろう。このように，漢字は形状を覚えるだけではなく，どのように発音されるかという点にまで学習が及ばなければならない。2010 年の改定常用漢字表には，2136 字の漢字に対して，さらに 4388 の音訓が付け加えられていることを記しておく。

以上，ざっと概観しただけでも，日本語はおよそ世界に普及しそうにない言語だということが分かるだろう。この種の議論には，さらに送り仮名といったテーマもあるのだが，日本人と文字の複雑な関係は上の現象だけを見ても十分である。ついでながら，近年の特筆事項としては，携帯電話やパソコン等で用いられる絵文字や顔文字の種類の豊富さをあげなければならない。ニューヨーク近代美術館が初期のドコモの絵文字 176 種類をコレクションに加えたというニュースは記憶に新しいが，やはりこの分野においても日本人の文字に対する情熱は群を抜いている。ただ，世界の大多数の国にとっては，日本人が用いる

表記法が世界のスタンダードになっては叶わないというのが本音ではあろうが。

2. 日本語と書字方向

さて，日本語には，文字の数や種類の多さと並んで，書字方向（文字を書き進める方向）にまつわる興味深い現象がある。筆者のスイス留学時代に，ノートの余白部分に日本語でメモをとったことがあった。まず横書きで右方向に書いて行き，ノートの端まで来てスペースがなくなると，今度は縦書きに変更して下方向にメモを続けた。つまり，直角に曲げて文章を書いたのである。すると，それを見ていた隣の学生が「Wahnsinnig（すごい）！」と叫び，周囲にいた学生達も「ジグザグにも書けるか」などと物珍しそうに集まってきた。確かに，日本語は縦にも横にも書ける自由さをもち，映画の字幕などは 2 種類の表示の仕方があって便利である。ただ，例えば「ありがとう」という 5 文字を続け字で書くような場合は縦書きでないと無理で，続け字は横書きには適さない。屋名池（2003）によると，文字の向きを傾けずに（つまり，文字が正面を向いたままの状態で）縦書きと横書きが共に存在するのは，世界的にも大変珍しいとのことである。しかも，中国語や朝鮮語は，日本語に江戸末期・明治初期以降に本格的な横書きが出現した影響で，横書きを採用するに至ったというのだ。日本語で，なぜ縦書きも横書きも可能かという理由は，四角い文字の形状にあるとされる。原稿用紙のマス目が示しているが，漢字とそれに由来するひらがなとカタカナは，正方形のスペースにうまく収まる。画数の多少に関わらず，「人」でも「論」でも，また「あ」でも「イ」でも同じ 1 マス分のスペースを占める。それに，英語の多くの文字に見られる大文字と小文字による形状の違いがない。小さく書く促音の「っ」や拗音の「ゃ」の場合でも，文字全体をそのまま小さく表記すれば済むのである。縦・横両書きを可能にするさらなる理由として，5 種類の文字体系を使う日本語では分かち書きをする必要がないという点も指摘できよう。単語と単語の間に空白スペースが生じないので，縦にも横にも文字を切り離さずに書き続けることができる。このように，日本

語の文字は縦書きでも横書きでも書きやすく読みやすいという性質が書字方向の多様性を許していると言えよう。

それでは，書字方向にはどのような種類があるのであろうか。横書きに関しては，1 行目と 2 行目が左右交互に続く「牛耕式」と呼ばれる珍しい型をはじめ，左から右に向かって書く「左横書き」と，右から左に向かって書く「右横書き」がある。この名称は，どこから書き始めるかに焦点を合わせた表現であることに注意しよう。「左横書き」ではインド系文字，ラテン系の文字が，また「右横書き」ではシリア・アラビア系文字，突厥文字が代表格としてあげられる（西田，1986：242）。アラビア語が右横書きであることは周知の通りだが，アラビア数字はインドに起源をもつため，数字部分だけは左横書きされるようである。つまり，左右の横書きが混在するわけである。ちなみに，右横書きの社会でも右利きの人が多いそうだが，アラビア語の筆法は“（右）上から左下に向かって回転するように左へ書き綴って行く”（世界の文字研究会（編），2009：120）ので，文字の書き方が本来左側に向かうということであろう。紙を反時計回りに傾斜させ，縦書きのような格好でアラビア語を書く光景は，恐らく右利きの人が右横書きをする際にあみ出した知恵なのであろう。

日本語における横書き誕生のプロセスに関しては，先の屋名池（2003）に詳しいが，その原因は，横書きする外国語の文字との関わりであると指摘している（p. 22）。それ以前は日本語には縦書きしか存在せず，また，右から左へ向かう「右横書き」も，本来は 1 行 1 字の縦書きであったと言われている。さて，この縦書きに関しても，下から上に向かって書いた希有なケースを除くと，大きく 2 種類の書字方向がある。右から左へ行を進める「右縦書き」と，左から右へ行を進める「左縦書き」である。ここでも，左右のどちらから行をスタートさせるかによって名前が付けられており，書き進む方向を示したものではない点に注意したい。西田（1986）によると，「右縦書き」の代表例は漢字系文字（漢字，西夏文字，女真文字など）で，「左縦書き」の代表例はウイグル系文字（蒙古文字，満州文字）やパスパ文字である。日本語の縦書きは「右縦書き」であるが，これは中国から伝わった漢字がそもそも右縦書きであったためである。しかし，そもそも漢字がなぜ右縦書きで書かれたのかに関しては，明

確な答があるわけではない。右利きの人が竹簡に書いて紐で綴じた際に自然だったとか，巻き物を左手で押さえて右から書き進めたとか，諸説知られてはいるが，書字方向は一般に“伝統的な習慣にすぎない”（堀田，2016）のが実情のようである。

日本語に横書きが存在する以上，ローマ字などの引用は横書きで対応すれば済むことである。さらに，巻き物に書く必要もない今日，漢字，ひらがな，カタカナを右縦書きで書き続けるメリットは皆無であろう。むしろ，左縦書きに変更した方が理にかなっていると判断できる点が多い。日本語における左縦書きは，その可能性を指摘されることはあっても，現行の書字方向のあり方に大きな影響を与えては来なかった[1)]。しかし，ここには，車の通行方向をどちら側にするかという議論以上の理由が存在すると思われる。その最大の理由として，まず周知の 2 点について，少し補足も加えながら具体的に見てみよう。1 点目は，漢字とそれに由来する仮名の書き順が，一般に，上から下，左から右へと向かうという点である。縦と横の直線から成る「正」の字を書くと分かるが，手の動きは「→」と「↓」との連続で出来ている。つまり，右に向かったら次は下へ，下へ向かったら次は右へ，というのがこの字を書く時の手の動きである。「日本」という字でも同様で，左はらいの筆画が含まれているものの，最終的には下か右に向かう動作で終わっている。基本的な漢字の構成要素である偏旁冠脚をとっても，やはり左部分から右部分へ，または上部分から下部分へという順に書いて行く。常用漢字の中で 1 画の文字は「一」と「乙」であるが，どちらも左から始まり右に向かって終わっているのが象徴的である。ひらがなやカタカナでも基本的には同じことが言える。仮名が出現した経緯からして当然であるが，「にほん」や「ニホン」という仮名も，左（部分）から右（部分）に向かって書くか，上から下に向かって書く。左はらい（またはそれに類似）の動きで終わる仮名（「め」や「ろ」，「カ」や「ノ」など）も，特にカタカナでは少なからず存在するが，切り離して書く仮名（「い」や「こ」，「ハ」や「リ」など）は，1 画目で左部分を書き，2 画目は右に向かう。ひらがなもカタカナも，水平に書く線は左から右に向かい，手の動きは漢字と実質的に変わらない。このような事実を考えると，1 行目で下に向かったら，2 行目は右に展開

するのが自然の成り行きと言えよう。したがって，左から右に向かって行を進める「左縦書き」の方が日本語には適していると言える。

「左縦書き」が推奨される 2 点目の理由は，右利きの人が左利きの人より圧倒的に多いということである。その割合は国によって多少の違いがあるようだが，おおよそ右利き 90％に対し左利き 10％という数字があがっている（国立国会図書館レファレンス協同データベース参照）。そうであるなら，多数派である右利きの人が書きやすい書字方向を選ぶのは当然であろう。PC で書く場合はさておき，右利きの人が手書きで縦書きをする場合，現行の「右縦書き」では書いた行が手で隠れてしまい，行間のスペースを均等に保つことも難しくなる。また，書き終わったばかりの文章を確認するには，いちいち右手を紙から離して見なければならない。つまり，現行の「右縦書き」には余計な動作を一つ増やしてしまう欠陥がある。

上記以外の理由として，横書きとの統一性という点も併せて指摘しておきたい。21 世紀に入り，裁判所の判決文でさえ横書きされる中，われわれは左から右に向かって書いたり読んだりする行為にますます慣れ親しんでいる。その「左横書き」では，1 行目を左から右に向かって書いた後，2 行目以降は上から下へと行を進めていく。「左から右へ」，次に「上から下へ」という動作を繰り返すわけだが，これと順番は逆ながら，動きが共通しているのは現行の「右縦書き」ではなく，「左縦書き」の方だ。文字と行との違いこそあれ，手や目が動く方向は同じである。PC で文書を書く頻度が高くなるにつれ，「左横書き」は今後さらに拡大して行くであろう。主流になる「左横書き」の視点から縦書きのあり方を逆に考えると，やはり「左縦書き」がより自然な縦書きと見なされて然るべきである。「縦書きあっての横書き」から「横書きあっての縦書き」へと発想の転換が求められる時代に入ったのではないだろうか。

一つ「左縦書き」の難点として指摘されるのは，ローマ字等を縦書きで引用する場合である（金田一，1988：40）。横書きしたローマ字の文を時計回りに 90 度回転させ，立てた状態で引用すると，次行に文が続いた際に「右縦書き」の場合は左の行に続くことになる。すると，また 90 度逆時計回りに横に戻して読むと次の行が下に現れ，読みやすい。ところが，「左縦書き」で同じことを

すると次の行が上に来て具合が悪い，というものである。しかし，「左横書き」がかくも一般化した現在，ローマ字をわざわざ縦書きで引用する必要はない。読む側がいちいち紙や頭を回す不便を考えると，横書きの外国語を引用する場合は，日本語も最初から横書きにすべきである。アラビア数字（算用数字）が縦書きに収まりづらいように，ローマ字も縦書きには元々なじまない。日本語の続け字が横書きでは無理なように，ローマ字の筆記体一筆書きも縦書きでは書けない。したがって，横書きの外国語を混在させる時は，日本語の書字方向を「左横書き」で統一させる以外に対処の方法がない。

3. 終わりに

以上，日本語の表記法と書字方向を取り上げ，縦書きにおいては現行の「右縦書き」から「左縦書き」に変更すべき理由を改めて主張してみた。言うまでもなく，「右縦書き」は日本最古の書字方向として深く歴史に根づいたシステムである。縦書きの書物が，組版から製本に至るまで「右縦書き」を基に成立している現状では，今の書字方向はそう簡単に変わるとは思えない。しかし，「左横書き」がローマ字やアラビア数字の使用と共にさらに拡大する現在，縦書きも思い切って「左縦書き」に変更すれば，すぐにその利点が感じられるはずだ。縦横共に「左から」書くことを試してみる価値は十分にあるだろう。もっとも，それも，縦書きが横書きの支配的勢いに負けずに生き残り，郵便ハガキが横長の形のみになったりしなければ，という前提の話ではあるが。

注

1）昭和 24 年，左縦書きを推奨するあまり，左縦書き用に製版・製本して一冊の書物を出版した例がネットに紹介されている。
“本を見て森を見ず”（2012）参照。

参考文献

金田一春彦（1988）『日本語（下）』岩波書店
金田一春彦（1991）『日本語の特質』日本放送出版協会

国立国会図書館レファレンス協同データベース「右利きの人と左利きの人の割合」［online］入手先〈http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000114063〉（参照 2017−06−16）
世界の文字研究会（編）（2009）『世界の文字の図典　普及版』吉川弘文館
西田龍雄（1986）「言葉と文字」西田龍雄（編）『言語学を学ぶ人のために』pp. 220−254，世界思想社
Fischer, S.R.（2001）*A History of Writing*, Reaktion Books.（鈴木晶（訳）『文字の歴史』2005 年，研究社）
堀田隆一（2016）「書字方向（1）」『英語史ブログ』［online］入手先〈http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2016-01-09-1.html〉（参照 2017−06−11）
“本を見て森を見ず”（2012）［online］入手先〈http://blog.livedoor.jp/benirabou/archives/52257266.html〉（参照 2017−07−08）
諸橋轍次（1960）『大漢和辞典』大修館書店
屋名池誠（2003）『横書き登場』岩波書店
屋名池誠（2015）「文字はどこを向いているか」専修大学図書館（編）『日本語の風景』pp. 195−239，専修大学出版局